

ともあれ、これら大同薬室旧蔵の膨大な蔵書の価値を認識し、労苦をいとわずこつこつと蔵書目録を作り上げられた内藤記念くすり博物館のスタッフ一同には、心からの敬意を表さずにはいられない。

(小曾戸 洋)

(内藤記念くすり博物館、岐阜県羽島郡川島町竹早町一、電話〇五八―六八九―二二〇一、二〇〇一年三月二十二日、A四判、五一〇頁、一〇〇〇〇円(送料込))

神戸十四郎 編

『宮崎県医史懇話会二十二年の歩み』

宮崎県医師会では、昭和四十九年三月の定時代議員会に『宮崎県医史編纂』の議が提案され承認されたが、その後、出版経費等について曲折があった。そして同五十三年三月に出版の目途がたった。

編纂の過程の中で、当時の医師会長内田醇先生と、副会長の田代逸郎先生が大変な努力を重ね、出版の暁には日本医史学会総会を宮崎市に誘致しようと運動され、第七十九回の総会を同五十三年三月二十五日、二十六日の両日、宮崎市での開催に成功された。

因に『宮崎県医史』は、B四判で上巻が一一九六頁、下巻が一二八九頁で総計二四八五頁の大著作であり、編纂の中

心、内田、田代両先生の他に一九名の先生方が編纂作業に参加された(発刊は五十三年三月二十四日)。

宮崎市での第七十九回総会は、内田先生が総会会長として、「宮崎県の医史学散歩」と題する会長講演を、田代先生が「宮崎県の明治に於ける公立病院」と題して特別講演をされ、また玉丸勇先生が「真木和泉と西郷南洲―その医学との関係」について特別講演された。

この総会開催の大成を記念して、『宮崎県医史』編纂委員の方々を中心に「宮崎県医史懇話会」が結成され、医史学の火を消すことなく県下の医師会員に広く医史を知ってもらおうと昭和五十四年四月十四日に設立された。

このような経過をもって設立された『宮崎県医史懇話会』の行事は、総会と幹事会を除くと、①総会日に研究発表を行う。同時にその年に行う医史跡探訪地の計画と紹介を行う。②医史跡探訪会を毎年開催し、探訪地の医師や史家と交流する。その地区の郷土料理店で食事をする。参加者の夫人同伴を歓迎する。③県下の記念すべき日に、植樹や碑建立を行う。④県医師会創立一〇〇年誌の刊行に協力する等があげられた。

ところで、この懇話会でこの二十二年間に訪れた史跡地を連記してみよう。

初年度が延岡、次いで飢肥、都城、児湯、日向市、佐土原・西米良、小林・西諸県、高千穂夜神楽、宮崎市、鹿児島市(この年はじめて県外に出る)、日南市、竹田市、中津市、日田市、

入吉市、飛騨高山(内藤くすり博物館での研修を含む)、東京都、高木兼寛先生生誕地(高岡)、串間地区、長崎市(オランダ修交四百年記念)となっている。

この本を拝見してまず感ずるのは、よく二十二年間も続いたなあということである。それには医師会の職員が運営に協力された由であるが、熱心な中心役員だけではとても二十二年も続くものではない。二〇回に及ぶ医史跡探訪旅行はこの懇話会の目玉であったが、ほぼ廻りつくした感もあり、この会の設立推進者であった内田、田代両先生の他界もあって、今後は形をかえて再発足するようである。

「二十二年の歩み」をコンパクトにまとめられたことは全国的にみて大変有意義なことで、各地の医史学会支部、研究会、懇話会等では宮崎県の大きな経験に学ぶことが出来よう。ご一読をおすすめる。洋数字の一部に誤植あり、ご注意。

(中西 淳朗)

〔宮崎県宮崎市橘通東四一三二二、電話〇九八五―二九一―二八六六、二〇〇一年七月三十一日、A五判、一八八頁、非売品〕

編集後記

日本医師会雑誌・第一二六巻第一〇号(平成十三年十一月十五日)に、東京大学名誉教授出月康夫氏(外科学)の「二重投稿と不正投稿」という講演録が載った。それによると、「他の雑誌に同じ内容の論文を投稿したことはない」旨の誓約書を提出しているのに、いまだに二重投稿や不正投稿が跡をたたないという。本誌でも平成十二年度に一件発生している。査読による審査を行って編集作業に入るわけであるが、委員は大変神経を使っている。学会によつては誓約と同時に、著作権の学会帰属の承諾まで行うところがある。これはどうも複写権の問題とからんでいるようである。ともかく本誌の投稿規定第一項にあるごとく「医史学研究に貢献しようもので他誌に未発表のものとする」のであるから、当委員会としては投稿時の誓約書までは取らず研究者としてのモラルを信ずる方針でいくことになった。査読して下さる方もご苦労であるが、編集委員もきつい仕事である。(中西 淳朗)